西洋における輪廻転生論の歴史

下田　淳

宇都宮大学共同教育学部研究紀要　第74号　別刷

2024年3月

西洋における輪廻転生論の歴史

History about Reincarnation Theory in the Occident

下田　淳[†]
SHIMODA, Jun

序：

輪廻転生の考えは、世界の神話を読むと、多くの民族にみられる。これはもう一度生きたいという人類共通の願いが物語化されたのであろうか。ただ、輪廻転生の考えを、教義をもった体系的宗教にまで高めたのは、ヒンドゥー教・仏教であった。中東から西は一神教である。キリスト教とイスラムは輪廻転生を認めない。しかし、西洋でも、輪廻転生論は、古代より現代にいたるまで脈々と底流を流れていた。本稿はその歴史の概観である（1）。

なお、本稿中の引用文は、原書の文章の省略等をおこなった部分があることをお断りしておく。

1：ヘロドトス（前484-425頃）

ヘロドトスは『歴史』（2）のなかで、エジプト人の輪廻転生論を述べている。それによれば、地下界を支配するのはデメテルとディオニソスの２神であり、人間の霊魂は不滅で、肉体が亡びると、次々に生まれてくる他の動物の体内に宿る。魂は陸に棲むもの、海に棲むもの、空飛ぶもの、とあらゆる動物の体を一巡すると、ふたたび人間の胎内に入り、３千年で一巡する。ギリシア人のなかには、この説を取り上げる者がいるが、ここでは名を記さないと書いている。訳者注によれば、オルフェウス教団、ペレキュウデス、ピュタゴラス、エンペドクレスらしい。

ヘロドトスは、また別の箇所（巻4、94、95）で、トラキア人は霊魂の不滅を信じ、将来は永遠の生を享してあらゆる善福に浴する場所に行くという。ここは神霊サルモクシスの所であった。このサルモクシスとは、実は人間でピュタゴラスの奴隷であったとも書かれている。

さて、ピュタゴラスやオルフェウス教団の輪廻転生論は後述するとして、これがエジプト起源であったのだろうか。エジプト神話にあたってみたが（3）、輪廻転生の記述はない。別の文献（4）で、暗示している箇所はあった。ヌト女神は死者の守護者であり、死者はこの女神によって再び生まれる。ティトエス神も死者の守護者である。死者の眠りは新たな生の目覚めとされた。エジプトにギリシアの輪廻転生論の起源を見るのは難しそうである。といっても、ギリシア神話にも輪廻転生や生まれ変わりの話は見あたらない。

2：オルフェウス教（前６世紀）

オルフェウスは、ギリシア神話では、死んだ妻のエウリュディケを連れ戻しに冥界に下る話で有名である。結局この試みは、妻の「決して私を見ないで」という約束を破ったため失敗に終わる。また、オルフェウスは、冥界下りの後、毎朝、アポロン神＝太陽神を拝むために、パンガイオン山に登っていたが、怒ったディオニソスは信女をさしむけ、オルフェウスは八つ裂きにされて手足はばらばらに

[†] 人文社会系 社会分野（連絡先：shimoda@cc.utsunomiya-u.ac.jp）

撒かれた。ヘプロン川に投げ込まれた首は、歌を歌いながら流れていくが回収され、信託をくだすようになったという(5)。

ここに外来神ディオニソスが登場している。神話では、このディオニソスも八つ裂きにされているのである。ゼウスの子ディオニュソスをゼウスの宿敵ティタン神族が八つ裂きにして食べてしまった。怒ったゼウスは稲妻で彼らを焼き殺し、残されたデョニュソスの四肢をアポロンに言いつけて、デルポイのアポロン神殿に埋葬させた。女神ヘラが救出したディオニュソスの心臓から、ゼウスはディオニュソスを再生させる。それからゼウスはティタン神族の灰から人間を作った。このため人間は、ティタンのような悪の要素と、ティタンが食したディオニュソスの神的要素をもつことになる。来世（次の現世）に幸せになるためには悪の要素を切り離さなくてはならない。そのために、人はこの世で秘教に入信し善行(禁欲生活)を積む。

人間の魂が不死なのはこの神的要素をもつからである。しかし、ディオニソスの母ペルセフォネの恨みから、魂は肉体（ソーマ）という牢獄に閉じ込められている。ティタン族がディオニソスを殺害した時に始まった魂の生まれ変わりという循環を止めるには、ペルセフォネの嘆きを鎮めなくてはならない。そのために、禁欲の生活を（菜食主義など）実践する。それによって魂が浄化されれば、輪廻から解放されて神の世界に行くことができる。一方、儀礼を怠ると動物に生まれ変わることさえある。

オルフェウス教は紀元前6世紀末以降成立し、民衆に人気となっていった。しかし、創始者が不明である。オルフェウス教信者にピュタゴラス学派もいたらしい。永遠の輪廻を苦痛と捉えたのはインド人と同じである。そこからの解放が解脱である。インドでは紀元前8世紀の「ウパニシャッド」に業(カルマ)、輪廻(サンサーラ)、解脱(モークシャ)の概念が明確に出ている。もしかしたら、インドから(エジプト)経由で伝わったのだろうか？

3：ピュタゴラス(前582-496頃)とピュタゴラス派

ピュタゴラスはオルフェウス教信者だったといわれる。オルフェウス教は古い民間信仰が元という説もある（6)。あるいは逆ではないのか？時代は同時代の紀元前6世紀である。彼がエジプトに留学したのはわかっている(7)。インド、チベット、中国まで赴いたという人もいる(8)。さすがにチベット、中国まではないだろうが、インドに赴いたなら、ピュタゴラスが輪廻転生を唱え菜食主義だったことも説明がつく。流れは、インド→ピュタゴラス→オルフェウス教？こんなに単純なものではないだろうが、3世紀のプラトン主義者ポルピュリオスは、輪廻転生論をギリシアに初めて持ち帰ったのはピュタゴラスと書いている。

ピュタゴラスは、学問は魂の浄めのための道具と考えた（9)。魂を浄めれば輪廻の苦痛から解脱できるということか。彼は、魂は動物にも転生すると考えた。

ピュタゴラスによれば、「万物全体の第一の始原と生成が揺り動かされて混沌とし、そして多くのものが寄り集まって種子として撒かれ、大地のなかで腐敗すると、わずかな時のうちに、一緒に生み出された動物と萌え出た植物との生成と分離が起こったが、その時同じ腐敗から人間が形成された」という。少し意味不明な文章であるが、オルフェウス教の人間形成譚とは明らかに異なる。また、彼は自分の過去生を語った(10)。

前世の業（カルマ）が次の生を決めるというヒンドゥー教的考えをピュタゴラスがもっていたかは不明である。チェントローネの『ピュタゴラス派』には、ピュタゴラスが因果応報の考えをもってい

たとある。ピンダロス（前522-442頃）も因果応報説をもっていた。罪を犯した者に対しては地底で容赦ない断罪が宣告され、善良な者には苦しみのない生が約束されている。しかし両者とも、三度不正から完全に過ごす勇気のあった者は皆、ゼウスの道を通ってクロノスの塔へ達するという。これは輪廻転生からの解放なのか。

エンペドクレス（前490-430頃）も輪廻転生を唱えたという。罪人、とくに神々の掟に背いた者は、至福の者たちの世界から追放され、その間を通じ、死すべきものどものありとあらゆる姿に生まれ変わり、苦しみ多き、生の道を次々とりかえると。ここでは輪廻は苦である。前世の業が次の生に影響する。至福の世界に入ると輪廻が終わるということが示唆されている。

エンペドクレスはピュタゴラス派であったといわれる。エンペドクレスは2霊魂説をもっていた。1つは、継起する化肉を通じて存続する進歩的な自己であり、人間の潜在的な神性と現勢的（顕在的）な罪科の担い手であることを職分とする、知覚とも思考とも関係のないダイモーンと、2つめは火的元素から生成し、死に際して火的な元素のなかに吸収される生命の暖かさであり、知覚と思考の主体であるプシュケーである。輪廻転生するのはダイモーンであるようだ（11）。

オルフェウス教とピュタゴラス派の関係について、チェントローネは、ピュタゴラス主義者自身がオルフェウス教の文献の著者であったという仮説を呈示している。

4：プラトン（前427-347）

ピュタゴラスの影響を受けたプラトン（12）は、『パイドン』で、死者たちは裁きの場に引き出され、善行をなした者、悪行を成した者、普通の者の魂は、それぞれの場に行くとソクラテスに語らせている。哲学によって己を浄めた人々は、上方の世界で全く肉体から離脱した生活を送るという。悪行を成した者と普通の生を経験した者は、それにふさわしい場所に行く。悪行をなした魂の行き先は地獄であるのか。

『国家』には有名なエルの物語が語られている。冥界に行ったエルの見聞という形で話は進む。それによれば、牧場に裁判官たちがおり、天と地に2つづつ穴が開いている。正しい魂は天の穴へ、不正な魂は地の穴に向かう。地は地獄である。天に行った魂も地に行った魂も、再び牧場に戻ってくるのだが、地での滞在は千年続く。牧場に戻った魂は旅に出て光の世界に赴く。そこで籤引きして順番を決め、次の生を選択する。僭主の生を選択する者もいた。オルフェウスは白鳥の生を選択する。女性たちに殺されたから女性の腹に生まれるのを嫌ったからだという。動物の魂も人間同様の過程をたどる。次の生に生まれる前、レーテ（忘却）の河の水を飲んで過去は忘れる。

この輪廻転生論は、生前の行為が天国行きと地獄行きを決めるが、それは次の生には影響せず、来世は自己選択となっている。いずれにせよ、輪廻転生に審判の概念が付加されたものである。『パイドン』の、哲学によって己を浄めた人々は、上方の世界で全く肉体から離脱した生活を送るという記述は、輪廻の牢獄からの解放とも解釈できる。

『パイドロス』では、魂の不死が語られた後、魂の本来の相（すがた）を、翼をもった一組の馬と、その手綱をとる翼をもった馭者とが一体となって働く力に喩えている。神々の場合は、馬と馭者はすべて善であるが、神以外のものにおいては、善きものと悪いものが混じり合っている。だから馭者の仕事は困難である。人間の場合、馭者が手綱をとるのは2頭の馬だが、1頭は美しく善であるが、もう1頭は正反対である。

翼のそろった完全な魂は、天空高く駆け上がって、あまねく宇宙の秩序を支配するが、翼を失うと

きは、何らかの個体にぶつかるまで下に落ち、土の要素から成る肉体をつかまえて、そこに住みつく。この魂と肉体が結合された全体は「生けるもの」と呼ばれ、そしてそれに「死すべき」という名が冠せられることとなった。ここには、人間には善悪2つの要素が存在するというピュタゴラス派の影響がみられる。

さて、『パイドロス』は続けて、人間の魂も馬に煩わせつつも、天球の外の真実性を観賞する場合がある。しかしある魂は馬が暴れるため真実性の一部しか見ない。また別の魂は翼が折れ、真実性の観賞ができない。真実性を観そこなった魂は、地上に落ちる。そして、この世に生まれる最初の代においてはいかなる動物のなかにも植え付けられない（ならば植物？）。真実性をこれまでに最も多く観た魂は地と美を愛する者、あるいは音楽を好む者、恋に生きる者の人間の種となる。以下、2番から9番までの生まれ変わる人の種類が説かれる。

魂がそこからやって来た場所（天空の外の真実性）に戻るには1万年を要する。翼が生じないからである。しかし、知と美を愛する生を送ったものは、1千年の周期が3回目にやってきた時、もし3回続けてそのような生を選んだならば、それによって翼を生ぜしめられ、3千年で帰還できる。それ以外の魂は、最初の生涯を終えると裁きにかけられ、ある者は地下の仕置きの場、ある者は天上のある場所でそれにふさわしい生活を送る。そして千年経ったら、どちらの魂も、次の生のための籤引きをして、それぞれが欲する生を選択する。かつて人間だった者が、動物からふたたび人間に帰るということも、この場合におこる。

肉体（ソーマ）に閉じ込められた魂は善行を積むことで魂が浄められ、輪廻の呪縛を離れて真実性に帰還するとプラトンはいっているのであるが、次の生が自己選択と矛盾するのではないのか？後期の『ティマイオス』では次の生は自己選択ではなく因果応報のようだ。現世で「悪を止めることがないなら、中略。それに類した野獣の性に変化し、中略。変転を重ねて、苦労が絶えることがないであろう」（14節）と述べている。また、『パイドン』では大罪を犯した者は動物に転生するとも言っている。これらの矛盾（いや、矛盾していないのかもしれない）は、書かれた書物の時期の違いによるものであろうか。

ちなみに、ピュタゴラスとプラトンの影響を受けたローマのキケロ（前106-43）は『国家論』第6巻「スキーピオーの夢」のなかで、スキーピオー（小スキーピオー）は、祖父（大スキーピオ）に、「わたしたちが死んだものと考えている祖父や父パウルスやほかの人々がじつは実際は生きているか、となお訊ねた。もちろんと彼（大スキーピオー）は言った。彼らは生きている。身体の束縛から、あたかも牢獄からのようにはばたいて逃れてきたのだ。しかし、おまえたちの生と呼ばれているものは死である」と語っている。さらに、やってきた故人である父パウルスに対して「父よ、これが生ならなぜわたしは地上でぐずぐずしているのでしょうか。どうしてあなたがたのいる所へわたしは急がないのでしょうか」と尋ねる。父は「そうではないのだ。というのは神が-おまえが見るすべてはこの神の聖域である-その身体の牢獄からおまえを解放したときでなければ、ここの入り口はおまえのために開くことはないからだ」。そして、父パウルスが子に語る。「スキーピオーよ、このおまえの祖父のごとく、おまえを生んだわたしのごとく、正義と義務を重んじるように。中略。そのような人生が天界へ、そしてすでに生を終え身体から解放されてあの場所、おまえが見ている場所に住む人々の集まりへと導く道なのだ」。最後に、こういった考えはギリシア人から学んだと明言している（13）。

5：アリストテレス（前384-322）

アリストテレスは輪廻転生論者ではない。彼に「魂について」とい論考がある。プラトンとの違いを考察してみよう。

アリストテレスの目的は魂の自然状態、つまりその本質的あり方（ウーシアー）を考察することである（13）。結論からいえば、彼はプラトンにみられる肉体とは別物として実在する魂を否定する。アリストテレスの物の捉え方は、形相（本質）と質料（実物）から成っており、たとえば、ある机は実物であるが、それを実物ならしてめいるものを形相と呼ぶ。この両者は分離することなく、結合している。魂の属性としての諸状態（たとえば怒りなど）は、動物の自然的な素材（質量）から独立に離在しないのである。つまり、魂は肉体（質量）の形相（本質）であって、両者は分離して存在することはない。言い換えれば､魂は可能状態において生命をもつ自然的物体の形相としての本質的存在である。

ということは、肉体が死ねば、魂も消滅する。アリストテレスは魂の不死を否定する。よって輪廻転生など問題とはならない。

だが、これとは矛盾するようなことも言っている。人間は、他の生物と違って知性（ヌース）を認識するとしたうえで、『魂について』第5章で、自然の全体において、一方では素材であるが、他方では、すべてを生み出すゆえに、原因つまり作用し生み出す能力を備えたものがある。同じように魂にもそのような区別が成立していることは必然である。素材に相当する知性が存在し、他方では原因に相当する知性が存在する。後者は光に比せられるようなものであり、可能状態である色に作用し、活動実現状態にする色にするからである。この知性は、（肉体から）離在し作用を受けず、本質的ありかたにおいて活動実現状態にある。この知性は分離されて存在し、まさにそれにあるところのものであり、それ以外ではない。これだけが不死であり永遠である。

死滅しないヌースは能動的ヌースと呼ばれるが、これは個々人の魂の不死のことでは無く、『形而上学』に記された永遠で不道な、感覚的事物から離れて存在する実体、すなわち神のことではないのか（15）。

6：聖書外典のなかの輪廻転生論

外典とは正典から除外された文書全般を指す。旧約では、紀元1世紀末にユダヤ教の正典が決定された際、旧約聖書の最初のギリシア語訳、いわゆる七十人訳に含まれながら、ヘブライ語正典に入らなかった諸文書を正式には外典というらしく、それ以外は偽典という。旧約外典・偽典は紀元前2世紀から紀元後1世紀の間に書かれたものである。それに対して､新約では偽典と呼ばれるものはなく、すべて外典と呼ばれる。2世紀から5世紀の過程で現在の形となった（16）。

本稿は、聖書正典・外典成立史がテーマではなく、あくまで、輪廻転生論が主題なので、聖書外典に、それが示唆されている箇所がないかにのみ関心がある。

まず、旧約外典『ソロモンの知恵』第8章の「わたしは生まれがよく、運良くよき魂に恵まれ、あるいは善良であったゆえに、汚れなき体に入ることができた」（9－10行）（17）は、前世の善行ゆえに次の生は良い身体に入ったと読める｡これはプラトンというより､エンペドクレス（ピュタゴラス派）に近い。いずれにせよギリシア思想の影響が認められる。

1世紀に書かれたとされる『第四マカベア書』第16章にこうある。

「しかし聖にして神を敬う母親はこのようなくり言を決してもらさず、またどの子供にも死なないようにと勧めることなく、また彼らが死んだ時にも悲しむことなく、かえって堅固な心を持って同じ

数の息子を不死の生命へと生まれかわらせ、信仰のために死を選ぶよう懇願し励ました」(12－13行)(18)。

もともとユダヤ教は律法宗教で、霊魂不滅や来世救済は唱えていなかった。ギリシア思想との接触で変容していったことは確かである。

『第四エズラ書』第7章「さて、死についてだが、一人の人が死ぬべきだという決定的命令が至高者から発せられると、霊魂は肉体を離れて、それを与えた方のもとに帰るのだが、そのとき霊魂はまず至高者の栄光をほめたたえる。もしその霊魂の持主が、至高者をあなどり、その道を守らず、律法を無視し、神を敬う人びとを憎む場合には、その霊魂はおちつく場所を与えられず、苦しみのうちに流浪し、なげき悲しみながら、七つの道をさまようのだ」。「死後には審判があって、われわれはもう一度生かされる。そのとき義しい者の名があきらかになり、不敬虔な者の行いもあらわになるのだ」(19)。前者の「流浪」あるいは「もう一度生かされる」とは輪廻転生のことなのか？

7：新約外典とグノーシス主義

新約外典に触れるまえに、グノーシス主義という1～4世紀頃に流行した神秘主義について概観しておく。なぜならこれがキリスト教と混淆して外典を成している場合があるからである。

グノーシスとは「認識」というギリシア語である。何を「認識」するのか。以下、筒井賢治『グノーシス』(20) を典拠に説明してみる。グノーシス主義では上位世界 (プレーローマ) に存する至高神と創造神 (デミウルゴス) を別物と考える。創造神の所産であるこの世界は悪であり、人間も悪である。ただ人間の一部には至高神に由来する要素（本来的自己）が残されており、救済とは、本来的自己が至高神のもとに戻ることである。人間の霊魂はプレーローマの出身であったが、今や現世に閉じ込められている。霊魂を閉じ込めている者は肉体（身体）である。そこから解放されてプレーローマに戻るのが救済で、そのことを人間に知らせるために遣わされたのがイエス・キリストであった。

至高神とエンノイア女神のペアから順次アイオーンと呼ばれる男女の神々が流出する。テレートスとソフィアに至るまで合計30のアイオーンが成立し安定していた。至高神を眺めることのできるのはヌース（叡智）だけであったが、最下位のソフィアが至高神を見ようと企てたが失敗する。ソフィアの情念はプレーローマの外に捨てられるが、それが創造神を産出し、創造神が人間を含めたこの世界を生み出す。ソフィアの情念はソフィアから出たものである。ソフィアはプレーローマの構成員だから、人間にはわずかにプレーローマの要素が含まれている。

人間の肉体に閉じ込められている霊魂＝本来的自己が、すべてプレーローマに帰還すれば、物質世界は消滅する。ちなみに、プレーローマ (霊的世界) の下位に「心魂的世界」、最下位に物質世界」があり、人間のなかにもこの3つの要素がある。

グノーシス主義も多くのバリエーションがあるようで、上述したのはキリスト教グノーシス主義の1バリエーションである。これが輪廻転生とどう関係するのか。

新約外典「ペテロの黙示録」31節にこうある (21)。「だから、苦しみを受ける部分が残るのである。身体が『代価』なのだから。解放されたのは、私の非身体的な身体である。しかし私自身は輝く光で満たされている叡智的な霊である。私のもとに来るのをあなたが見たのは、われわれの叡智的な完成 (プレーローマ) であり、完全な光と私の聖なる霊との結合である」。

「ヨハネのアポクリュフォン」58節「肉体の牢獄」では (22)、「前略、物質―これは暗闇と無知のことであるーと欲望と模倣の霊から。これこそ身体のこしらえ物の洞窟であり、人間の上に強盗たちが

着せ付けたもの、忘却の鎖である。そしてこれが死ぬのが常の人間となったのである。これが最初に下降してきたものであり、最初の分裂である。しかしやがて彼の中に在ることになる光のエピノイア(配慮)、彼女が彼の思考を呼び覚ますであろう」。

人間の霊魂は身体の牢獄に閉じ込められているが、霊魂も暗闇と無知である。しかし、その一部は光であって、これを呼び覚ますことが必要なのであると述べている。

「ヨハネのアポクリュフォン」をさらに読み続ける。72節以下。「そこで、私は言った、主よ、それでは、この者たちの魂ですが、それらは彼らの肉を離れた後、どこにゆくことになるのですか。すると、彼は微笑んで私に言った、その力が内側で、忌むべき霊（＝模倣の霊）よりも増大することとなる魂、この魂は強い。そしてそれは悪を離れるものである。また、不朽なる者の訪れによって救われ、永遠の安息へと受け入れられるものである」。「そこで、私は言った、主よ、では自分たちが誰に属するか者なのかを認識しなかった者たちについては、彼らの魂は一体どこへゆくのですか」。すると彼は私に言った、「その者たちの場合は、彼らが迷った際に、忌むべき霊が彼らの中で増大してしまったのである。そして、それはその魂を抑えつけて、悪の業へと引きずってゆき、忘却へと投げ捨てるものである。魂は抜け出た後は、あの第一のアルコーン（創造神・悪神）によって存在するようになった諸力の手に渡される。そして、彼らはその魂を鎖に繋ぎ、牢獄に投げ込み、あちこちつれて動き回る。その魂が忘却から目を覚まし、認識を受け取る時まで。そしてそれは、もしそのようにして完全となる者とならば、救われるのである」。「そこで、私は言った、主よ、それではどのようにして魂は少しずつ小さくなって、母親、あるいは夫の自然の身体の中に戻ったのですか。私がこのことを彼に尋ねると、その時彼は喜んだ。そして私に言った、君は実に幸いである。君は今や理解したのだから。その魂は、生命の霊を内に宿した別の魂に後に従わされるものである。その魂は生命の霊によって救われ、また別の肉のなかに投げ込まれることはない」。

難解な訳であるが、この箇所は重要である。言っていることは、浄化された魂は安息の場所、つまり生命の霊の場所に到達するが、そうでない魂は永遠に牢獄としての肉体に入り転生を繰り返す。キリスト教的グノーシス主義の輪廻転生論とそこからの「解脱」を説いたものである。

実は正典である「マタイの福音書」にも輪廻転生を示唆する箇所がある（Mt 17, 12f.)。「あなたがたに言っておく。エリヤはすでにきたのだ。しかし人びとは彼を認めず、自分かってに彼をあしらった。人の子もまた、彼らから同じようにされるだろう。その時、弟子たちは、イエスが洗礼者ヨハネのことを言われたと悟った」。洗礼者ヨハネは旧約に登場するエリヤの生まれ変わりと読めないこともない。

マニ教もグノーシス主義と一バリエーションである。青木健『マニ教』（23）から概観してみる。

マニ教は、マニ・ハイイェー（216-277年）の説いた宗教である。まだ宇宙が始まっていない頃、時間の神（バイ・ズルヴァーン）が光の王国を統治していた。他方、別の場所に暗黒の冥界があり、悪の王アフレマンが統治していた。ある時、アフレマンは光の王国の存在に気づき、そこへの侵入を試みる。この時点から宇宙が動き出す。光の王国のズルヴァーンは悪の王への対抗のため、最初の人間オフルマズドを創る。しかしオフルマズドとその軍団は悪の軍団に破れ、ズルヴァーンに由来する光の諸要素が暗黒の物質に囚われ、精神が物質に捕囚された現在の状況が出現する。冥界に落ちたオフルマズを、ズルヴァーンはミフル神を創って救出させる。しかし、光の諸要素は依然として物質に飲み込まれた状態である。ミフル神と生命の母は、悪魔を何匹か捕え、その肉体から大地、天空、黄道を創造し、残りの悪魔たちをそのなかに押し込んだ。だから宇宙は暗黒の要素から出来ていること

になる。ミフル神は、さらに何匹かの悪魔から光の要素を奪還し、それで太陽と月と光の柱を創った。さらに、ミフル神と生命の母から第三の使者が創造され、彼は、悪魔を欲情させ光の要素を輩出させる。輩出された光の要素は地上に落ちて動植物となった。ところが悪魔たちは、光の要素を物質のなかに閉じ込めておくため、特別な悪魔たちを創り、それに性欲を付加し交尾させ、アダムとイヴを誕生させる。彼らのなかには暗黒の物質から構成される肉体の再生産をする生殖機能がプログラムされているので、光の要素がそこから脱出するのは困難となった。

つまり、宇宙と人類は暗黒の悪魔を材料にとして創造された。純粋なのは、光の要素から創造された太陽、月、光の柱（天の川）と人間の魂である。悪魔たちの牢獄である宇宙と、光の要素の牢獄である人間（身体）はパラレルな関係となる。人間は悪魔によって光の王国の記憶を消去され、故郷を見失っている。人間がどこに帰還すべきかを知らしめるために預言者が不可欠となる。

預言者イエス・キリストは、アダムに光の王国の記憶を蘇させることに成功する。しかし、イヴは性欲に負けカインとアベルを生んでしまう。こうして繁殖する人類が誕生した。救済は、光の要素を解放させ、光の王国に帰還させることである。そのために善行を重ねねばならない。

個人の死後の運命は、禁欲主義をどれだけ遵守したかに応じて、聖職者、一般信徒、異教徒に三分類される。聖職者が、福音の叡智によって自己認識し、戒律を守って魂を浄化した場合（ということは、肉体に捕らわれた人間の魂が不浄になるということを想定している）、オフルマズドが管理を任されている天国（光の王国）に行く。異教徒は、死後ただちに悪魔に捕食され地獄に行って永遠に苦しむ。どちらにも属さない一般教徒は、天国も地獄も行かず、現世の生物の肉体に乗り移って輪廻転生を繰り返す。どの肉体に転生するかは、生前の行いの審判によって決まる。最終的に、善行を積み重ね魂が完全に浄化されれば天国に帰還できる。この後、最後の審判で天国行きと地獄行きが、最終的に決定される。

マニ教は、ゾロアスター教、ユダヤ・キリスト教、ヒンドゥー教・仏教などから部分的に拝借して創った複雑な物語である。ただ、宇宙と人間の肉体が悪で、魂が解放されて光の国＝プレーローマにいくことを目指す点でグノーシス主義である。輪廻転生はその過程である。

8：神秘主義・新プラトン主義・輪廻転生論

プロティノス（205-270年頃）は新プラトン主義の創始者とされている（24）。プロティノスは、究極の原因者を「一」「ト・ヘン」と呼んだ（これは、老荘思想の道や大乗仏教の法身仏に類似するように思われる）。すべてがここから「流出」する。「一」からヌース（知性）が、知性から魂が流出した。この魂は純粋魂で、そこから世界魂と個々の動植物の魂が流出した。世界魂から物理的世界が生じた。われわれの魂は、現世においても、ヌース、さらには「一」と合一できる。これは一種の神秘主義（Mysticism）である。プロティノス以外にも様々な人物が３～７世紀に活躍した。

プロティノスは、プラトン主義者として、また万物の究極的始原として「一」を想定したが、この「一」は数ではない。何らかの実体でも何らかの性質でも量でもない。知性でも魂でもない。動いているものでもなければ、静止しているものでもない。場所のうちになく、時間のうちにもない。形相（イデア）以前の無相である。

何かわかったようでわからないが、「一」とは何なのか。ここから有（存在）が生み出されるという。神と定義しても、神以上のものであるという。あらゆる外部からの影響のない自足的充足的なものであるともいう。つまり言語では表現できない究極である。始原であるから、ここからあらゆるものが

発出する。つまりこういうことなのだろう。因果関係をずっと遡った始原であると。これは釈迦に否定された概念である。

この「一」とどうやって自我＝魂が合一するのか？プロティノスによれば、魂は直観のうちに自分自身を忘れることによって「一」と合一できる。忘我の状態にまで魂をもっていくことによって合一するということである。

また、魂は円運動だという。円の中心から魂が出てきているから、円の中心に魂をもっていけば合体できるとも述べている。しかしこの中心は「一」ではないともいう。魂は「一」から出てきたものだから、自分自身が本来出てきたものになるのが合一である。プロティノスによれば、現世は脱落の結果、魂の追放の結果であるという。この本来あった「場所」に魂が回帰するという考えは、神秘主義の基本的概念の１つに思える。

絶対者と自我の合一を、絶対者＝神を体験するといういわば幻視体験とするならば、新約聖書「使徒行伝」（第22章）のパウロの回心がすぐに想起される。「旅を続けてダマスコの近くにきた時に、真昼頃、突然、つよい光が天からわたしをめぐり照らした。わたしは地に倒れた。そして、『サウロ、サウロ、なぜ私を迫害するのか』と、呼びかける声を聞いた。これに対してわたしは、『主よ、あなたはどなたですか』と言った。すると、その声が、『私は、あなたが迫害しているナザレびとイエスである』と答えた。わたしと一緒にいた者たちは、その光は見たが、わたしに語りかけたかたの声は聞かなかった」。

これを絶対者との合一と呼ぶには異論もあるかもしれんが、パウロ＝サウロは神＝イエス＝絶対者を体験したのである。これは、神＝絶対者の方からパウロの魂に働きかけ、パウロの魂が神を体験したから、ある意味「受動的合一」である。

中世ドイツ・キリスト教神秘主義というと、まずマイスター・エックハルト（1260-1328年頃）が思いつく（25）。エックハルトにも合一の箇所がある。「魂という神殿について」のなかで、イエスが語るのを魂が聞きたいと思うならば、魂はみずから沈黙しなければならない。まさにこのようにしてイエスは内へと入り来て語り始めるのである。これはパウロの体験と類似している。

イエスは魂のうちにはかりしえない知恵をもってみずからを顕わす。この知恵と魂が合一するならば、魂からあらゆる疑い、迷い、闇が完全に取り除かれる。神が自己の魂に入り、神を体験するということである。

他方で、魂が神と合一するとき、自らの内から流れ出て、みずからの最初の源泉へと直接に流れ還るとも言っている。魂が「本来の場所」に帰還するのか？

彼は、また「神は無である」と語っている。この意味がわからない。老荘の道は無であるといったようなものなのか。「パウロは地面から起き上がって、目を開けたが、何も見えなかった」。一であるものをわたしは見ることはできない。彼は無を見た。それが神だった。神はひとつの無であり、そして神はひとつの何かである。何かであるもの、それはまた何ものでもないものである。

エックハルトは「離脱」という概念で、合一を説く。「わたしがわたし自身を強いて神へと到らせることよりも、わたしが神を強いてわたしに来たらせることの方が何倍もすばらしいことである。その理由は、わたしの側から神へと合一するよりは、神の側からの方がより強くわたしと結びつき、よりいっそうよくわたしと合一することができるからである」。

また離脱するには、神以外の何ものも受け入れる状態にあってはならない。魂を無にするとも言っている。これはどういった状態なのだろうか。無心・忘我ならプロティノスも暗示していたはずだ。

シャーマニズムの概念では、魂の身体からの離脱をエクスタシー（脱魂」）という。エクスタシーとは別に、絶対者（あるいは霊的存在）が自我に憑依する場合もある。これはポゼッションという（26）。

そもそも、絶対者と合一した自我（霊魂）はどうなるのか？シャーマンの脱魂と憑依なら、魂は再度シャーマンの正常な身体におさまるだろう。神＝絶対者を現世で認識、もっと具体化すれば「見る」なら、単なる幻視ではないのか？これなら、「合一」した後も現世で生き続けられる。

合一して消滅するなら魂の死であろう。この場合、合一した後現世で生きることはない。絶対者に取り込まれるということでも同じである。これは輪廻転生論で絶対者と合一すれば、輪廻から解放されるという考えに近い。

つまり、神秘主義には、現生で、つまり生存したままおこる現象と、死後におこるものとで区別しなければならないということである。また、少なくとも釈迦と初期仏教は永遠不滅の絶対者など否定していたから、絶対者との合一は語れない。となると初期仏教の解脱概念は、別個に考察しなければならない。

ところで、プロティノスは、プラトン主義者だから輪廻転生を唱えたのであろうが、それはどういったものであったのか。

それを検証する前に、究極の原因としての「一」を唱えたキリスト教神学者オリゲネス（185-254年頃）に言及したい。彼は『諸原理について』（27）第1巻6章「終末について」のなかでこう述べる。

「一なる始原から発した多くの種々異なったものは、再び神の善良さによって、キリストへの服従、聖霊との一致によって、始原に似た（同じと訳した方がわかりやすい筆者）一なる終極へと導き戻される」。

オリゲネスは万物の創造者である神と始原である「一」を区別しているように感じる。

第2巻1章「世について」では以下の通りである。

「この世がこれほど多様なものであり、理性的生き物についてもこのように多様であるからには、世が生来した原因をどこに求めたらよいのであろう。すべてがその始原の状態に返還されるはずであるかの終末を考慮するなら、この世の生来の原因をどこに求めたらよいのだろう。中略。神は、その知恵の名状しがたい術によって、ありとあらゆる出来事が、何かしら有益なものとなるように変え、導かれる。つまりこれほどの精神の多様性へと分離していったこれらの被造物が、その精神の動きにもかかわらず、一なる世の充満及び完成に仕上げられるよう、また精神の多様性そのものが一なる完成の終末を目指すように、心を一つにして行なわれる協力へと、神はこれらの被造物を導かれる」。

つまり始原は「一」で完成していた。神が万物をつくった。ここに「一」は属さない。被造物は何かの原因で堕落してしまった。神はこれを救済し「一」に戻す。これが終末であるということであろう。この世の終末は次の世の始原であるとも述べる。宇宙が輪廻しているかのような記述である。同様の記述は、第三巻5章「ある時から、世は始まったこと」のなかにも見られる（28）。

第二巻9章「世、並びに善であれ悪であれ理性的被造物の行動及びその原因について」ではこうある。

「神が望まれるなら以下に説明する通り、審判の日には、善なる者が悪なる者から、義なる者が不義なる者から離され、各自がその功績に応じて、神の裁決によって、ふさわしい場所に配置されるであろうことは疑問のない事実である。しかし、これと同様のことがかつてもなされたと私には思われる。というのは、神は常にすべてをご自分の正しい裁判によってなされ、配置されると考えるべきだからである。使徒パウロが、中略、もし人が自分を清めるなら、彼は尊い清められた器となって、主人に役立つものとなり、すべての善いわざに間に合うようになると言っている。このことは、疑いも

なく、現世での生活中、自分を清める者は、来たるべき世では、すべての善のわざに備えられるが、自分を清めなかった者は、その不浄の程度に応じて、来たるべき世では、卑しいことに用いられる器、即ちふさわしくない器になることを言明している」。

この文章、とくに最後の部分は、因果応報にもとづく輪廻転生を言ったものである。さらに、第3巻1章「自由意志について」では以下の通り。

「先行する原因の故に、神はある者を尊い器に、ある者を卑しい器に造られたという我々の説に従えば、神の義を証明することに何の差し障りもない。即ち、以前の原因の故に、この世に尊いものと作られた器は、怠慢な生活を送るなら、その振る舞いの報いとして、次の代では卑しい器とされる可能性がある。同様に、先行する原因の故に、この世で生きるために卑しいものとして創造主から造られたものは、もし自らを矯正し、すべての悪徳と汚れを洗い清めるなら、かの次の代では、尊い聖化された、主人に役立つ、すべての善なるわざに備えられた器とされることも可能である」。

ここも因果応報による輪廻転生を語った部分である。さらに、第三巻6章「世の完成について」のなかで。

「肉体の復活を信じている我々は、死によって肉体はただ変化させられるのみであると理解している。つまり、その肉体の実体は存続し、自分の創造主の意思によって、一定の時、再び生命を与えられ、再び変容させられるのは確実である。こうして、初めに地から出て土の肉体であったものが、死によって分解されて、再び灰と土となりーおまえは土だから土に帰るだろうと言われているー、土から再び復活させられ、その後、その内に宿る魂の功績に応じて、栄光に輝く霊的身体になるのである」。

この「霊的身体」は、最後の審判での肉体の復活を言ったものだが、前半部分、つまり「一定の時、再び生命を与えられ、再び変容させられる」は輪廻転生を示唆していよう。アウグスティヌスと並ぶ教父であったとされるオリゲネスは、543年のコンスタンティノープル公会議で異端と断罪された。

さて、プロティノスの著作『エネアデス』I-1「生命あるものとは何か、人間とは何か」は、こう語る(29)。

「肉体と魂の結合した全体が生命とよばれるものである。魂は肉体を道具として使用する。しかし、われわれは、上位にある不可分の魂と、肉体の領域にある分割可能な魂とから成っている。分割可能な魂は、肉体と共有するもののなかにある感覚（能力）をもち、それが分割可能な魂の第一の影像であり、次に、その感覚能力に魂の種類と称せられるあらゆる能力が次から次へと連なり、最後に生殖能力や生長力に至って終わる。それに対して、われわれのあの上位の魂は、その本性において、人が行ったり、こうむったりする劣悪な事柄の責めから解放されている。劣悪な事柄は上位の魂ではなく、魂と肉体が共有するものに関連している。魂に獣が加算されている場合と、すでにそれを超えている場合があり、真正な人間は、獣とは別、獣的情念は浄化され、知活動の諸徳を所有している。まことにこれらの徳こそ、肉体から分離している上位の魂のなかに在る。」

プロティノスは、上位の魂と下位の魂に分類し、冥府で罰を受けたり、或る肉体から別の肉体に宿りなおすのは下位の魂と言っているのであろうか？しかし、下位の魂は上位の魂から下降してきたものと述べる。いずれにせよ、魂の転生はプラトンに則って認めるが、あまり重要ではないように思われる。プロティノスにとって、自己の魂（これは浄化された魂）が、究極の原因としての「一」と合一することが目的であるからなのだろう（30)、輪廻転生は二義的なものなのだろう。『エネアデス』Ⅰ-6「美について」では、「魂は浄化されと、ロゴスとなってまったく肉体のないもの、知性的なもの、神のようなものになる」と述べている。

プロティノスの「一」をキリスト教の神と読み替えれば、キリスト教神秘主義となる。古代のアウグスティヌス(354-430年)や中世のエックハルトに大きな影響を与えたのもうなずける(31)。

しかし「魂の諸問題について第一篇」(『エネアデス』IV-3)ではこう語る。

個別的な魂は、宇宙の魂の支配のもとに既に存在している肉体を籤で割り当てられた。中略。魂の物体(身体)への入り込みは2通りの途がある。1つは、ある物体(身体)に宿っていて、別の物体に宿りなおす入り込みである。すなわち、空気からなる物体や火からなる物体から、土からなる物体に宿りなおす入り込みであって、この物体へのはいりこみを転生であるとはいわない。もう1つは、非物体的なものから何らかの物体(身体)へのはいりこみで、これこそ魂にとっては、物体(身体)との最初の交わりでもあるのである。

これは、まさに転生の有り様を語った部分である。さらに、魂の審判による罰(有罪の宣告を受けた魂は、たとえ自分では気づかなくても、受けるにふさわしい罰へと導かれる)や清浄な魂は「神的なるもの」に留まり転生を止めるといった記述はプラトン的あるいはピュタゴラス的でもある(32)。

プロクロスによれば(33)、あるものから発出したものはすべて、実体の面で、その発出の源となっているものに帰って行く。すべてのものは、自己の原因から発出して、円環状の動きをしながら、その原因へと帰って行く。魂も同様に説明する。まず、魂は三種類存在する。「神的な魂」、「知性を分有している魂」、そして「ある時は知性へ、別の時は知性を欠いた状態へ変化する魂」である。「神的な魂」から「知性的魂」が発出し、「知性的魂」から「変化する魂」が発出すると言っていると理解できる。そのうえで、この世界に内在するすべての魂は、自らに固有な生命の周期をもち、その出発点に回帰する。すべての部分的な魂は、限りなく生成の世界に降下し、かつ、生成の世界から存在の世界に上昇する。

これは輪廻転生を言ったものである。生と死を繰り返し運動するのである。最終的には「神的な魂」となり、その不動の原因者(一)に帰還するという意味なのだろう。

紀元前3世紀から紀元後3世紀にエジプト・アレクサンドリアで複数の著者たちによって書かれた文書群『ヘルメス文書』にも、新プラトン主義の特徴が見られる。たとえば「ヘルメース・トリスメギストスの鍵」と題された文書にこうある(34)。

万物は1つの原因(アルケー)に依っているが、この原因は一にして唯一なる者に依っている。そしてこの原因は、再び原因となるために運動しているが、「一」(ト・ヘン)は一人静止して運動することがない。そこで、次の三つのものがある。神にして父なる者=善、世界(コスモス)、人間である。神は世界を包み、世界は人間を包んでいる。中略。子よ、嬰児の魂を見るがよい。それがまだ自分自身として本来の自己から分離しておらず、それが有する身体が〈、、、〉まだ十分に嵩(かさ)をもっていない状態においては、どこから見てもこよなく美しい。それは未だ身体の受動によって濁されたことがなく、世界の魂になお完全に依存したままでいるからである。しかし、身体が嵩を増し、魂を身体の塊のうちに引きずり下ろすと、魂は本来の自己から分離し、忘却(レーテ)を生み出し、美にも善にも関与しないものとなる。つまり忘却が悪となる。中略。

人間の魂は、そのすべてではなく敬虔な魂は、なにがしかダイモーン的であり、なにがしか神的である。このような魂は、身体から解放された後も敬虔への戦いを続け、-敬虔への戦いとは神的なものを認識し、決して人を虐げないことである-全体が叡智(ヌース)になる。

これに対して、不敬虔な魂は自己生来の本質に安住し、自分自身によって懲らしめられながら、自分が入れるような地上の身体-とは言っても人間の身体だが-を探し求める。人間の身体と言うのは、

他の種類の身体では人間の魂を受け入れることができないし、人間の魂がロゴスなき生き物の身体に陥ることは許されないからである。

ここでは人間以外への転生は認めないが、まだ完全に浄化されていない魂は輪廻転生を繰り返すという認識を読み取れる。

「ヘルメース・トリスメギストスからタトへ-普遍的叡智について」では以下の通り。

生命がある所には霊魂もあるように、霊魂のある所には叡智（ヌース）もある。しかしロゴスなき生き物にあっては、霊魂は生命であるが叡智を欠いている。それは叡智が恩恵を施すのは人間の霊魂だけだからである。叡智は、人間の霊魂を善に向かわせる。また、ロゴスなき生き物のために叡智はそれぞれの本能と協力するが、他方人間の本能に対しては対立する。それはどんな霊魂でも身体に入るや、たちどころに苦痛と快楽によって貶められるためである。合成された身体の体液が沸き立つように、苦痛と快楽も同様であって、霊魂はそのなかに入ると溺れる（35）。ここには、身体が悪とのグノーシス主義的考えが見える。

新プラトン主義は徐々に輪廻転生に言及しなくなっていく。同主義に影響された元ドミニコ会修道士で、後に異端として火刑に書せられたジョルダーノ・ブルーノ（1548-1600）による『傲れる野獣の追放』（36）は、ローマ神話のユピテルの物語だが、「ケフェウスの追放と知恵の導入」の箇所に「マルスが言いました。あのケフェウスは、かつて王であった時、運が彼に与えた王国を拡大するために悪意をもって武器を操作することができました。しかし今は、彼がいつもの流儀でこの場所で腕を広げて歩きながら天の広い空間を占領するのはよいことではありません。ユピテルは言いました。それならば、彼にレテの水を飲ませることにしよう。そうすれば、彼は地上と天上の財産を忘却し、足も腕もない動物クジラとして再生することになるだろう」とある。これは転生話である。

9：ユダヤ神秘主義

中世以降、輪廻転生論は、ユダヤ教神秘主義（カバラ）のなかでも記述された。ショーレムによれば（37）、ユダヤ教神秘主義も、ギリシア神秘主義やキリスト教神秘主義と異なることなく、歴史的現象の一総体である。絶対者との神秘的合一ということである。これが輪廻転生とどう関係するのか。

1275年頃、カスティーリャ地方で1つの書物が著された。セーフェル・ハ＝ゾーハル、『光輝の書』と訳される（38）。これはカバラーの歴史のなかで占める位置は絶大であるようだ。『ゾーハル』によれば、隠れた神、神性の最も内なる自己はいかなる規定も属性ももたない。ここは第一世界で、何人も隠れた神を隠れている神自身以外は観ることはできない。エン・ソーフ、「無限なるもの」である。第二の世界はそれより高い第一の世界に結びついているが、神が認識される世界である。神の神秘的属性とは、エン・ソーフの不可解な本質が、第二世界で明らかになる光の世界である。

『ゾーハル』は人間のなかに3つの霊魂を見る。ネフェシュ（生命）、ルーアハ（精神）、ネシャーマー（霊魂そのもの）である。ネフェシュのなかにすでにこの3つが包含されているが、最高位のものはネシャーマーでこれを獲得するのは申し分ない敬虔者だけである。万人に与えられている生得なネフェシュのみが罪を犯す。死後の霊魂の懲罰はネフェシュに限られる。『ゾーハル』でも、他のカバリスト同様、霊魂の先住を説く。また霊魂の地位や等級は前世の状態に依存するらしい。これは輪廻転生・因果応報のことではないのか。

死後の霊魂は、トーラーの掟を遵守した善人は天国に行く。この天国は霊魂が先住していた清浄無垢な世界である。だが、罪人の霊魂は裁きの前に引き出され、地獄の「業火の河」で浄化される。浄

化されれば、天国に戻れるのか？しかし、極悪人はそこで焼き滅ぼされてしまう。罪人とは一般人を指すのだろう。『ゾーハル』は言う。魂が浄化され、清らかにこの世から昇っていくと、それらはみな名前を付けられて大切に仕舞われていた神の名簿に書きこまれる。そして魂がまた地上に降りたいというと、かれはふたたびこう言う。この魂はこの身体に入れるとしよう。中略。だが、昇ってきた彼女が罪にまみれて主の目に悪く見えたら、主は彼女に身体をあてがわず、彼女には身体がなくなる。中略。彼女が改悛したら、かれは彼女を地獄の道から救い出す。中略。魂にやましいところがなく、立派な守りの服をまとっているときだけ、あまたの聖なる軍勢はこころよく彼女にくみし、彼女をエデンの園（現世なのか天国なのか？）に送ってくれる（39）。

ここでは、善なる魂は天国に行くが、ふたたび地上に舞い戻る機会も与えられている。これは転生のことである。

ショーレムによれば、カバリストは輪廻をすべての霊魂の普遍的な法則とせず、『ゾーハル』においても、特定の場合にのみ、とりわけ生殖活動に反する行為と関連して生じるという。寡婦と亡夫の兄弟との婚姻（レヴィトラ婚）という制度が輪廻の理論で説明される。死者の兄弟がその寡婦と結婚すると、その者は彼女の亡夫の霊魂を彼岸から引き戻し、それを再構成する。かくして死者の霊魂は新たな肉体のなかで新たな精神となる。しかし、レヴィトラ婚だけに転生を限定するのは、先の説明と明らかに矛盾するのではないのか。

輪廻の思想（ギルグール）は、すでに『バーヒールの書』（1180年頃）に初出する。ここでは前世と来世の因果応報が説かれる（40）。あるカバリストは霊魂が人間以外に転生するといい、ある者は拒否し、ある者は、輪廻が特別な罪に対する罰とした。輪廻転生の論理はカバリストによって種々あったようだ。ある者は、まず天国と地獄に行った後転生をすると言った。これはプラトンに類似する。

イアサク・ルーリア（1534-72）とその学派によれば、人間の魂は、課された課題をすべてなし終えない限り輪廻転生を繰り返す。輪廻は前世の報いと前世でなしえなかった課題の遂行を意味する。動物や植物への転生は因果応報である。人間の課題は、人間の精神の原形態を回復することにある。魂はすべてもともとそのような原形態を潜在的にもっている。しかし、その魂のなかにすべての魂が含まれていたアダムの堕罪以来そこなわれ、品位を失っている。魂から火花が四方八方に散らばって、諸事物のなかに沈降した。魂の火花を再び取り集め、その正当な場所に運び上げて、人間の精神的本質を、本来神によって意図されていたとおり純粋なままに再生しなければならない。

つまり輪廻転生はそのための手段ということなのか。アダムが全人類の魂を含み、それが今や無限に全人類に配分されているなら、魂の遍歴（輪廻）は、アダムの堕落を追放によって償わねばならない原魂の遍歴に他ならない。個々人の場合は、さらにそれ固有の振る舞いが作り出す新たな追放の無数のきっかけが付け加わる。個人の魂はすべて、それがその精神的回復をなし終えるまで、つまり神の掟（課題）を全うし終えるまで輪廻する。神の掟（課題）を全うした魂は輪廻の法則から解放され、至福の場所に至る。ただ、儀式、贖罪や瞑想のような宗教的行為によって、輪廻の過程が短縮可能となる。また魂は親和性があって、相互に連関し合う魂の家族のようなものをもっている。彼らは互いに助け合いより高い状態へと上昇することを目的とする。

ルーリアの思想は17世紀以降急速に普及したようである。魂の究極的課題のための輪廻による教育、親和性をもった魂のグループといった思想が、19世紀以降の神智学（協会）に影響を与えたことは明白であろう。

ルーリアの思想を大衆化したのが東欧ハシディズムといわれる。ハシディズムは、18世紀初頭、バー

ル・シェム・トブによって始められたユダヤ教神秘種主義の一運動である。これはイディッシュ文学にも反映されている。アンスキー作『ディブーク』がその例である。アンスキーは、第一次世界大戦中ロシア軍のガリツィア遠征に同行し、その地のユダヤ人社会の破壊を体験した。その地のキリスト教とにも、ロシアの農民にも、コサックの軍人にも激しいユダヤ人憎悪を見た。それが『ディブーク』を書くきっかけとなる。内容は省略するが、本稿の関心の魂の死後の世界についてはこう語る。

死者の霊は何らかの形を借りなければならない。悪人の霊は獣、鳥、魚、草木となり、聖者の救済を待つ。あるいは新しく生まれる人の胎内に入って善行を積み自己の魂を清める。あるいは生きている者の身体に憑依霊の形で乗り移り、魂を清めるという(41)。

ハシディズムによれば、悪の侵入は創造の出来事に帰する。創造の恩恵の火の奔流が最初に創られた原型、つまり「容器」に豊かに注ぎ込まれる。しかしその容器は、それに持ちこたえられず破壊される。奔流は無限の火花として飛散し、殻がそのまわりに生じ、欠如、染み、災いがこの世界に起こった。これが悪の起源である。これが、物資の殻、鉱物、植物、動物のなかに隠された。救いは、この悪を浄化し、鉱物から植物へ、植物から動物へ、動物から人間へ、さらに人間の悪の魂が浄化され、根源(神)に帰還するまで、輪廻する(42)。

10：ボゴミール派とカタリ派

グノーシス主義を基盤とする中世のキリスト教異端にボゴミール派とカタリ派がいるので簡単に紹介しておく(43)。

ユーリー・ストヤノフ『ヨーロッパ異端の源流-カタリ派とボゴミール派』によれば、ボゴミール派は10世紀にブルガリアで成立した異端である。ボゴミールという司祭によって始められた。ボゴミールとは「神に愛されし者」とい意味である。善と悪の二元論であるが、ゾロアスター教とは異なり、宇宙つまりこの世は悪の産物と捉える。その意味でグノーシス主義である。はじめ肉体をもたぬ善神のみが存在していた。彼は宇宙を創造し、最上天に神の宮殿を造り、そこは光の国であった。神は天使も創造した。天使たちはおのおのの領分を管轄すると共に、神に貢ぎ物を支払っていた。無数の天使とともに、神は、サタナエルという名の自分の補佐役を創造した。サナタエルは自分の地位に満足できず、神に嫉妬した。神に背いて自分の王国をつくることにした。サタナエルは貢ぎ物を軽減することを条件に天使たちを誘惑した。一方、神は反乱が準備されていることを知ると、激しく怒り離反者を罰することにした。神は、離反者から神の光輝きを剥奪し天上界から追放した。

サタナエルは地上に落下すると、そこに自分の王国をつくることにした。神にその許しを願いでた。神は、7世紀にわたって支配させるが、それと交換に離反して三分の二に減少した天上の天使をもとに戻すため堕天使を返すよう命じた。合意に達すると、サタナエルは世界と人間を創った。太陽と人間の魂は神から盗んだ。別ヴァージョンでは神から頂戴した。人間の肉体をつくるために、天使を粘土の身体に入り込ませ、男(アダム)を創った。その一部から女(イヴ)を創った。

これはマニ教の影響が大きい物語である。まず、宇宙は悪の創造物である。人間の魂は神のもとから来たので純粋だが、肉体（物質）という悪に束縛されている。人間はサタナエルの圧制下で苦しんでいた。堕天使は悪魔となり、人間に取り憑き、これによって人間は悪に対峙するようになった。神は、自ら創造した人間の魂が責め苦を受けているのを悲しみ、大天使ミカエル＝イエス・キリストを派遣した。このキリストは非物質的存在で仮現的に人間として行動した。サタナエルはキリストを磔刑にしたが、三日目に蘇りサタナエルを地獄に放り込んだ。キリストは使命を果たすと天に帰り父と

一体となった。しかし、サタナエルは地獄を脱出し、再度地上を支配した。過酷な圧政がまだ始まった。しかし、キリスト再臨の時はやがて来るという。

人間は神に由来する善なる魂と、悪魔に由来する罪に満ちた肉体からなっている。人間の魂は肉体の牢獄に閉じ込められている。ここから抜け出して神のもとに戻ることを求めている。これは、キリスト再臨で成就されるのか、輪廻転生を重ね、魂を浄化することで達成されるのかは不明である。死んだら肉体から解放されるので、天上世界に戻る可能性も説いたようだが、釈然としない。もともと魂が純粋なら、浄化の必要はないのではないか。人間の魂の一部は「神的」だが、一部は不浄だから、善行を積み浄化させるというのが理にかなっている。あるいは肉体をもつゆえに悪行に走る。だから善行を積めば、純粋な魂は肉体から解放されると解釈されるのか。前述したように悪魔に取り憑かれたから魂のある部分は悪と解釈するのが自然である。

ボゴミール派は『新約聖書』のみ使用し『旧約聖書』を拒否する。教会制度、洗礼・聖体拝領・告解などの儀式も退けた。飲酒・肉食を禁止した。結婚も否定的であったという。また、「完全者」と呼ばれる人と一般信徒の区別があった。「完全者」になるためには禁欲生活を続け、叙階される。「完全者」には聖霊が宿り、悪魔は影響を及ぼせなくなる。死後、肉体の呪縛から解放され、神の王国に赴く。それでは、一般信徒の魂はどうなるのだろうか。ストヤノフは、ボゴミール派は輪廻転生を説いたことを示唆している（前掲書、345、350頁）。

カタリ派（純潔たるもの）は、ボゴミール派の影響を受けて11世紀から西欧に広まった異端である。とくに北イタリアのロンバルディア地方と南フランスのラングドック地方で多くの信者を集めた。以下、原田武『異端カタリ派と転生』から概要を述べてみる。

カタリ派は、ボゴール派同様、神に属する霊魂と悪魔の所産である肉体という人間観をもつ。救済は禁欲活動に専念することで、霊魂が肉体の呪縛を越えるまで純化され、神の国に帰還することである。しかし、それを達成できるのは「完全者」になった者で、そうでないものは「完全者」になるまで輪廻転生を繰り返す。だから自分のうちに眠る神的霊魂を自覚・認識することが絶対条件となる。死んで肉体が消滅しただけでは神的霊魂は神と合一できないのである。グノーシス主義では、人間はデミウルゴスが神的霊魂を物質のなかに閉じ込めてできた産物だから、魂も悪の要素を含んでいるはずである。だから魂の浄化が必要なのだ。本来的自己の認識である。

カタリ派では、サタンに誘惑された堕天使たちが、神の怒りをかい天界から地上に追放される。しかし落下にあたって、天使たちの「霊的分身」は天界に残された。天使の魂（アーム）だけが地上に降り、霊（エスプリ）とその「衣服」は天に残った。サタンは地上に連れてきた天使の魂を、泥でできた身体に入れて人間をつくったという。ならば、この魂には、天使の神的要素と誘惑に負けた堕天使の悪の要素が混合しているはずである。だから、悪の要素を取り除き天界の霊とその衣服と合一することが、人間の救済となる。さらに魂の封じ込めの際に「忘却」の措置がとられたから、生成の由来を知らない。キリストは、この「忘却」を思い出させるために神から派遣された。最後の審判は、天使の堕落ですでになされた。この世は地獄である。「完全者」になるためには「救慰礼」という入信儀礼をおこない、按手による天界の霊の注入を受けることが必要であった。そのうえで戒律と節制を守り魂を浄化すれば、輪廻転生の呪縛から解放される。なお、転生は人間だけでなく血液をもつ動物のあいだでも起こるという。

カタリ派は数世紀活動を続けたが、14世紀に殲滅させられた。

11：イスラムの輪廻転生論

ヤズィード教は、イラン、イラク、シリア、トルコの少数民族クルド人に数十万の信者をもつ（44）。青木健の解説によれば、イスラム以前のイラン系宗教で輪廻転生を信じ、カースト制を維持しているという。また、牡牛を生け贄に捧げクジャク姿の天使であるマラク・ターウースを崇拝する。牡牛とクジャク崇拝は、私見によれば、インダス文明の信仰にあったはずだ。他に、レタスを食べず、青い服を着ず、男性は口ひげをはやす。信者はキリスト教とのように洗礼を受ける。カーストの最上位は、ヒンドゥー教のバラモンに当たるシャイフと呼ばれる聖職者である。教義は謎だらけである。ただ、最初の預言者はアブラハムで最後はムハンマドというのはイスラムから取り入れたものだろう。ギリシアの哲学者たちも預言者になっている。しかし、預言者よりも、地・水・火・風の四大元素、とくに火が重要で、それは太陽崇拝と結びつく。

輪廻転生を信じ、人間以外、動物（植物？）にも転生するらしいが、詳しい教義は不明であるが、イスラム・シーア派の分派で輪廻転生を信じるアラウィー派に類似するという。アラウィー派はシリア沿岸部でコミュニティを形成しており、ラクダやウサギを食べない、異性の動物の肉を食べない、聖別されたワインを飲むミサを行うという。転生は動物・植物にも及ぶ。ヤズィード教徒同様、火を崇拝する。

ヤズィード教徒の祭りでは、復活祭のように卵に色を塗るという。かつて世界は液体で、それが調理された卵のような固体となり、その無色の固体の上にマラク・ターウースがクジャクの羽を置き、そこにできた緑と青の影が森と海になったという創造神話をもつ。ヤズィード教のクジャク崇拝はインダス文明の信仰を想起させ、火の崇拝は明らかにイラン系である。

アラウィー派同様、輪廻転生を信じるイスラムの分派がドゥルーズ派である。青木健の解説によれば、まず、アリー・イブン・アビー・ターリブ（661年暗殺）を正統カリフとするシーア派であった。次に、グノーシス主義、新プラトン主義、ピュタゴラス主義を導入して、8世紀にシーア派の多数派から分離したイスマーイール派となった。最後に、ファーティマ朝6代カリフ、ハーキム・ビアムリッラー（1021年失踪）を神として崇拝するという教義がつけ加わって、11世紀にイスマーイール派から独立してドゥルーズ派となった。

これだと、かなり内容が見えてくる。要するにシーア派の一派が、ギリシア哲学と習合したのがイスラムの輪廻転生論である。グノーシス主義、新プラトン主義、ピュタゴラス主義とも輪廻転生を唱えたことは先に見たとおりである。イスラム圏にはギリシア思想が導入され研究されていたことは衆知であるから、イスラムに輪廻転生を唱える宗派があってもおかしくはない。とくに、グノーシス主義の影響が強いといわれる。イスラムの輪廻転生論は、グノーシス主義的シーア派と現象とする研究者もいる。その代表が、初期シーア派のイマームを神格化した分派グラート（Gulat）派、アラウィー派、ドゥルーズ派であった。肉体は衣服で、死ぬとそれを脱ぎ捨て、新しい衣服＝肉体を着るという考えは、肉体を悪いものとするグノーシス主義であろう。

ドゥルーズ派信者は約100万人、アラウィー派とは異なって植物に転生することは認めない。また、ドゥルーズ派は自らのコミュニティ内で生まれ変わると信じている。目的は魂の浄化である。それによって神と一体化する。転生が終了するのは最後の審判の時であるようだ。ただ、宗派内で見解が統一されているわけではない。

12：神智学協会

輪廻転生を唱えたのは、18世紀ドイツのプロテスタント敬虔主義聖職者のなかにもいたが、ここでは省略する(45)。

神智Theosophyとは「神を知る」「神を認識する」という意味で古代から使われていた用語である。広い意味では、神秘主義はすべて神智学である。

ショーレムは、この概念を近代の疑似宗教を表すのに使用される以前の、言葉の古き良き用法の意味で理解するとし、キリスト教神秘主義者のヤーコプ・ベーメとウィリアム・ブレイクを神智学者と呼んでいる(46)。

ショーレムによって、ここで疑似宗教とされているのは、1875年にブラヴァツキーらによって創設された「神智学協会」の思想とその派生のことである。

ここでは、1915年初版のアーヴィング・S・クーパーの本から大枠を見てみよう(47)。彼は、神智学の源流として、ピュタゴラス主義、新プラトン主義、錬金術、バラ十次会、フリーメーソン、科学を挙げる。科学が挙げられているのは、理論的で実証的と言いたいようである。また、人間進化を全うしたが、人類の成長を助けるために人間界に留まっている大師と呼ばれる人たちの存在を語る。大乗仏教の菩薩ごときである。

非物質的領域は大きく分けて、アストラル界(感情界)とメンタル界(天国界)から成る。また、人間は、肉体の他に、オーラ、エーテル複体、感情体、メンタル体、魂(コーザル体)を有している。死後、それらは肉体から抜け出しエーテル質量に取り囲まれる。しばらくすると、エーテル質量は徐々に消滅していき、感情界(アストラル界)に気づく。やがて、感情体を脱ぎ捨て、天国界に至る。天国界は低位から高次まで多層である。低位天国界での滞在期間は、到達した進化段階や地上界での経験の両によって決定される。上位に行けば、メンタル体(精神体)は剥がれ落ち、成熟した魂の真なる自己に至る。しかし、未進化の魂は、この高尚な状態を一瞬体験するに過ぎず、再度低位に降りていき、ついには、魂が前世(複数)において関係を築いていた両親によって提供される肉体に生まれ変わる。

地上世界で過ごす人生は、魂の人生のほんの1日に過ぎない。地上界は魂の進化の学校である。若い魂は、人生の幼稚園の教育に赴き、霊的に発達した魂は、地上界という学校から卒業の時を迎える。地上界は、その過去生の経験によって魂を進化させる学校である。進歩知れば、前世で使用した肉体より幾分ましな肉体に戻ってくる。逆もある(因果応報？)。転生は永遠には続くわけではない。すべての授業が終わると、完璧な段階に達すると卒業する。そしてより偉大な義務を果たすべく仕事に就く。

運命とは教育計画であって、厳しい授業もあるが、それは驚くほど有効である。私たちは、不死の魂として自らの運命の創作者である。因果応報は自分が計画した人生の結果である。前世で撒いた種を後世で刈り取るのである。宇宙は進化している。神とは絶対的宇宙生命、宇宙意識である。進歩は無限である。

以上列挙してみたが、マニ教にも劣らない「人工的想像物語」と感じるのは私だけだろうか。もう1つ見てみる。神智学協会と袂を分かったルドルフ・シュタイナー(1861-1925)である。彼は、自分の思想を人智学Anthroposophieと呼んだ(48)。

彼は、人間を肉体、魂、霊の3要素から成ると考える。肉体は生殖能力を始めとする物理的存在で、その点で動植物と同じである。魂は感覚、知覚、感情などの内的領域である。さらに高次の霊の領域

に属している。より細かく言えば、以下の7つの領域に、人間は属している。1、肉体、2、エーテル体もしくは生命体、3、感覚する魂体、4、悟性体、5、霊に充たされた意識魂、6、生命霊、7、霊人。

1から3までが物質界、4と5が魂界、6と7が霊界に属する。人間の霊は、死後あらたに再生するまでの途上で、魂界を遍歴した後、霊界に入り、新しい肉体を受けるための機が熟すまで、そこに留まっている。霊界滞在の意味を理解するには、輪廻転生の意味が正しく理解されねばならない。

人間は肉体をもつことによってのみ、物質界に働きかけることができ、肉体を道具として使用する。物質生活をおくる霊は、肉体を基礎として、地上の物質界と互いに作用し会う。輪廻転生を重ねつつ、物質界に働きかけを行うことが人間の霊の使命である。地上の活動の目標と意図は、霊たちの国で設計される。人間の霊は死ぬたびごとに、繰り返して霊界に住み、再びこの世で生きるための準備をする。地上世界は創造の場であると同時に学習の場である。霊界ではこの学習の変化が霊の活発な能力に変化させられる。このようにして霊が成熟していく。ある人生が前世より不完全になる場合があるが、転生を続けていくうちに調整される。

霊界は7領域から成っている。霊界の第一領域では、人間は事物の霊的原像にとりかこまれている。この領域で人間は思考内容のなかを遍歴する。霊界のこの最下位の領域内で成果として実るものは、地上生活の日常的状況である。第二の領域は、地上での共通の生命が思考存在として、いわば霊界の液体成分として流れている場所である。人間は第一の領域では生前身近な縁を結んでいた魂たちといっしょにいるが、第二の領域では、同じ崇拝対象、同じ信条等によって結ばれていると感じる魂たちの領域に入る。ただ、霊界の諸領域は仕切られているわけでなく、相互浸透している。霊界の第三領域は、魂界に存在する一切が、生きた思考存在として現われる。以上の3領域は、霊界の下の魂界・物質界に対し特定の関係をもっている。なぜなら、この2つの世界で身体と魂の原像である生きた思考存在が在るからである。

純粋の霊界は第四領域から始まる。霊界の霊としての本来の人間の姿＝真我は、第五領域にまで上昇した時に現われる。第六領域は、すべての行為を宇宙の真実性にしたがった仕方で遂行する。第七領域で、人間はさらに一層高次の世界から、宇宙使命のため移植された「生命核」たちに向き合う。同時に自分自身の「生命核」を認識する。ここで輪廻転生から解放される。

シュタイナーの文章は意味不明な点が多い。たとえば、地上の生活の目標は霊界で設計されるという一方、前世の原因が来世に影響するいわゆるカルマの法則（因果応報）を主張する。矛盾しているようだが、ともかく、シュタイナーにとっても輪廻転生による魂の成熟が述べられ。霊界の第七領域まで上昇すれば輪廻の苦しみから解放されるということなのだろう。

おわりに代えて

欧米の研究者は、西洋の輪廻転生論は東洋に比べ因果応報を強調せず、現世での教育を特徴とするというが（49）、その起源は先に見たように、16世紀カバラーのルーリア派である。それ以前は、東洋同様、輪廻転生を苦と捉え、そこからの解脱（解脱）を試みるものであった。しかも東西とも「解脱」は魂の浄化（方法が善行にせよ苦行にせよ）によって果たされるという点は同じである。

現世での教育による魂の進化という考えは神智学協会と人智学に受け継がれた。これはダーウィンの進化論の影響もあったように思える。ちなみに、ルーリア派起源の魂の成長・進化のための輪廻転生という概念が、退行睡眠による前世療法（50）の事例と酷似しているのが不可解であるが、この問

題は本稿の課題ではない。

注

(1) 西洋における輪廻転生論の歴史は例えば以下をみよ。Helmut Zander, Geschichte der Seelenwanderung in Europa. Alternative religiöse Tradition von der Antike bis heute. Darmstadt (1999); Norbert Bischofberger, „Der Reinkarnationsgedanke in der europäischen Antike und Neuzeit,in: Perry Schmidt-Leukel (Hrsg.), Die Idee der Reinkarnation in Ost und West. München, pp. 76ff. (1996); Helmut Obst, Reinkarnation. Weltgeschichte einer Idee. München (2009).

(2) ヘロドトス『歴史』巻2、123, 岩波文庫、上、松平千秋訳、pp. 276ff., p. 492 (1971).

(3) ヴェロニカ・イオンズ『エジプト神話』酒井傳六訳、青土社、pp. 264ff. (1991); 村治笙子・片岸直美＝文、仁田三夫＝写真『図説エジプト「死者の書」』河出書房新社 (2002).

(4) ステファン・ロッシーニ・リュト・シュマン・アンテルム『図説エジプトの神々事典』矢島文夫・吉田晴美訳、河出書房新社, pp. 18, 101,134,139,183 (1997).

(5) 以下、ミルチア・エリアーデ『世界宗教史』3、島田裕巳訳、pp. 244ff. (2000); レナン・ソレル『オルフェウス教』脇本由佳訳、白水社 (2003).

(6) 左近司祥子『謎の哲学者ピュタゴラス』講談社選書メチエ、pp. 41ff. (2003).

(7) ポルピュリオス『ピタゴラス伝/マルケラへの手紙/ガウロス宛書簡』山田道夫訳、京都大学出版界、pp.9ff. (2021).

(8) OSHO『永久の哲学-ピュタゴラスの黄金詩』市民出版社I, pp. 8ff. (2004), II, pp.219ff. (2006).

(9) 左近司祥子『謎の哲学者ピュタゴラス』pp. 73ff.

(10) ポルピュリオス『ピタゴラス伝/マルケラへの手紙/ガウロス宛書簡』、pp. 36, 62; B. チェントローネ『ピュタゴラス派』斎藤憲訳、岩波書店、pp. 65ff. (2000).

(11) 鈴木幹也『エンペドクレス研究』創文社、pp. 57, 342 etc. (1985).; 左近『謎の哲学者ピュタゴラス』pp. 37ff. (2003).

(12) プラトン『パイドン』岩田靖夫訳、岩波文庫、pp. 162ff. (1998).『国家』(下) 藤沢令夫訳、岩波文庫、pp. 397ff. (1979).『パイドロス』岩波文庫、藤沢令夫訳、pp. 67ff. (2010);『ティマイオス』プラトン全集12, 横山恭子訳、岩波書店、p. 59 (1975). プラトンについては前稿「異界のイマジネーション - 宗教・神話・シャーマニズム」『宇都宮大学共同教育学部研究紀要』73 (2023)、pp. 15-16 (2023) でも述べたが、16頁の第二段落『パイドン』は『パイドロス』の間違い。ここに謹んで訂正する。

(13) 『キケロ―選集』8、「国家について」岩波書店、pp. 158ff. (1999).; スチュアート・ペローン『ローマ神話』中島健訳、pp. 164ff. (1993); 山下太郎『ラテン語を読む　キケロー「スキーピオーの夢」』ベレ出版、2017年、332頁以下。引用文はこれら二書から。

(14) 『アリストテレス全集』7、「魂について」岩波書店、pp. 12ff. (2014).

(15) アリストテレス『形而上学』(下) 岩波文庫、p. 154 (1961); 高橋巌『神秘学入門』筑摩書房、pp. 32ff. (2000).

(16) 日本聖書学研究所『聖書外典偽典』1、旧約外典Ⅰ、教文館、pp. 4ff. (1975).荒井献編『新約

聖書外典』講談社文芸文庫、1997年、pp.11ff.

(17) 『聖書外典偽典』2、旧約外典ＩＩ、教文館、p. 37 (1977).

(18) 『聖書外典偽典』3、旧約偽典Ｉ、p. 134 (2012).

(19) 関根正雄編『旧約聖書外典』下、講談社文芸文庫、pp. 159-201 (1999).

(20) 筒井賢治『グノーシス-古代キリスト教の〈異端思想〉』講談社選書メチエ、pp. 22ff. (2004).

(21) 荒井献・大貫隆・小林稔・筒井賢治編訳『新約聖書外典ナグ・ハマディ文書抄』岩波文庫、p. 109 (2022).

(22) 同、pp. 188ff.

(23) 青木健『マニ教』講談社選書メチエ (2010).

(24) 水地宗明・山口義久・堀江聡編『新プラトン主義を学ぶ人のために』世界思想社、pp.3ff. (2014). 田中美知太郎責任編集『プロティノス・ポルピュリオス・プロクロス』世界の名著15, 中央公論社、pp.122ff. (1980).

(25) 『エックハルト説教集』田島照久編訳、岩波文庫、pp.19ff. (1990).

(26) 菊池章大『エクスタシーの神学-キリスト教神秘主義の扉をひらく』ちくま新書、2014年、10頁; I・M　ルイス『エクスタシーの人類学-憑依とシャーマニズム』平沼孝之訳、法政大学出版局、1985年、19頁；ミルチア・エリアーデ『シャーマニズム-古代的エクスタシー技術』上、堀一郎訳、ちくま学芸文庫、2004年、31頁以下。

(27) オリゲネス『諸原理について』小高毅訳、創文社 (1978). 以下も参照。小高毅『オリゲネス』清水書院 (2016).

(28) オリゲネス『諸原理について』、p. 261.

(29) 田中美知太郎監修『プロティノス全集』第一巻、中央公論社、pp. 160ff., 170ff. (1986).

(30) 『新プラトン主義を学ぶ人のために』pp. 12, 72.

(31) 田中美知太郎責任編集『プロティノス・ポルピュリオス・プロクロス』世界の名著15、中央公論社、p. 247 (1980).; 『プロティノス全集』第一巻、p. 291.;『プロティノス・ポルピュリオス・プロクロス』、p. 263.『エックハルト説教集』田島照久編訳、岩波文庫 (1990).

(32) 『プロティノス全集』第三巻、pp.51, 61ff., 100ff.

(33) 『プロティノス・ポルピュリオス・プロクロス』pp. 473ff., 569ff.

(34) 荒井献・柴田有訳『ヘルメス文書』朝日出版社、pp. 236ff. (1980).

(35) 同書、pp. 298ff.

(36) ジョルダーノ・ブルーノ著作集『傲れる野獣の追放』加藤守道訳、東信堂 (2013).

(37) ゲルショム・ショーレム『ユダヤ神秘主義-その潮流』山下肇他訳、法政大学出版局、以下の叙述参照。pp. 14, 205ff.,273ff., 317ff., 369ff. (1985).

(38) エルンスト・ミュラー編訳『ゾーハル-カバラーの聖典』石丸昭二訳、法政大学出版局、pp. 49ff., 158ff., 211ff., 225f., 428 (212).

(39) ミュラー編訳『ゾーハル』pp.166f.

(40) Gershom Scholem, Seelenwanderung und Sympathie der Seelen in der jüdischen Mystik, in: Olga Fröbe-Kapteyn ed., Der Mensch und Sympathie aller Dinge=Eranos Jahrbuch 1955, vol. 24, Zürich, pp. 61, 71, 82 (1956).

(41) 市川祐『生と死をつなぐ想像力-東欧ハシディズムの救済信仰』細田あやこ・渡辺和子編『異界

の交錯』上巻、リトン、199ff.（2006）.

（42） マルティン・ブーバー『ハシディズム』平石善司訳、みすず書房、pp. 19, 93（1997）.

（43） 以下の叙述。ユーリー・ストヤノフ『ヨーロッパ異端の源流 - カタリ派とボゴミール派』三浦清美訳、平凡社、pp. 210（2001）.；原田武『異端カタリ派と転生』人文書院（1991）；ディミータル・アンゲロフ『異端の宗派ボゴミール』寺島賢治訳、恒文社、pp.86ff.（1989）；渡邉昌美『異端カタリ派の研究-中世南フランスの歴史と信仰』岩波書店（1989）.

（44） 以下の叙述。ジェラード・ラッセル『失われた宗教を生きる人びと』臼井美子訳、亜紀書房、pp. 80ff., 192ff.（2017）；Reiner Freitag, Seelenwanderung in der islamischen Höresie. Berlin, pp. 3, 9ff.,56ff.,134ff., 153ff（1985）.

（45） Helmut Obst, Reinkarnation. Weltgeschichte einer Idee. München, pp.111ff.（2009）.

（46） ショーレム『ユダヤ神秘主義 - その潮流』、p. 271.　神智学協会については、前稿「異界のイマジネーション」『宇都宮大学共同教育学部研究紀要』73（2023）21頁で簡単に触れた。

（47） アーヴィング・S・クーパー『神智学入門 - 古代の叡智を求めて』林葉喜志雄訳、アルテ（2010）.

（48） ルドルフ・シュタイナー『神智学』高橋巌訳、ちくま学芸文庫（2000）.

（49） Helmut Zander, Geschichte der Seelenwanderung in Europa. Alternative religiöse Tradition von der Antike bis heute. Darmstadt, pp. 65f. , 622ff.（1999）; Perry Schmidt-Leukel, „ Reinkarnation und spiritueller Fortschritt im traditionellen Buddhismus“, in: Perry Schmidt-Leukel（Hrsg.）, Die Idee der Reinkarnation in Ost und West. München, P.29（1996）.キリスト教神学者からの輪廻転生論の否定は例えば以下。Werner Thiede, „ Warum ich nicht an Reinkarnation glaube“, in: Evangelische Zentralstelle für Weltanschauungen. 1368, 1997）, pp.1ff. 他方、1996年の調査で、当時のドイツ人の20%～25%が積極的に、50%があるていど輪廻転生を信じているという文献もある（Walter Sparn, Die Reinkarnationslehre: eine religiöse und kulturelle Gerausforderung an das Christentum, in: Arbeitahilfe für evangelischen Religionsunterricht an Gymnasien? Gelbe Folge, 1997, p.3）。神学者や宗教学者が輪廻転生論にかなり興味をもっていることは、たとえば、文献検索サイトIndex Theologigcusをみよ。

（50） 例えば以下参照。ブライアン・L・ワイス『前世療法』全2巻、山川紘矢・亜希子訳、PHP文庫（1996-97）。前世療法の信憑性・危険性については以下。Gabriel Andrade, „Is past life regression therapy ethical?“, in: Journal of Medical Ethics and History of Medicine, 2007.

令和5年8月3日受理

History about Reincarnation Theory in the Occident

SHIMODA, Jun